

## 5-2 教育改革のための情報通信技術活用に伴う知識と戦略的活用の普及

### 5-2-1 教育改革ICT戦略大会

#### <事業計画>

各大学は、国の大学改革実行プランに沿って教育の質的転換に向けて、改革努力を続けている。例えば、三つのポリシーによる教育方針の明確化、カリキュラム・マップ・シラバス改善などの教育課題の体系化、成績評価の厳格化、アクティブ・ラーニングの組織的教育の実施、ポートフォリオ・IRなどによる学修成果の可視化など、全学的な教学マネジメントの確立に着手したところである。しかし、これらの取り組みは制度・仕組みの整備であって、必ずしも教員個人及び教員間による教育内容の調整・改善に取り組む質的転換につながっていない。

そこで本大会では、新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、社会及び世界から信頼される人材育成の内部質保証のあり方について、三つのポリシーの一貫性、整合性の面から探求することにした。

#### <事業の実施状況>

「教育改革ICT戦略大会運営委員会」を継続設置し、「教育改革ICT戦略大会」を実施した。以下に、委員会及び大会の活動を報告する。

#### 教育改革ICT戦略大会運営委員会

4月26日、5月27日、6月14日、11月19日に平均8名が出席し、4回開催した。教育改革の基本的な課題やアクティブ・ラーニングにおけるICT（情報通信技術）の活用と効果、教育活動を振り返る情報環境システムの整備、新しい情報リテラシー教育の提案を中心に知識・理解を促進し、啓蒙・普及するため、「教育改革ICT戦略大会」の企画・実施準備を行った。

#### (1) 開催要項の策定

大会のテーマを「教育の質的転換に向けた内部質保証を考える」とした。各大学教育の質的転換に向けて三つのポリシーを設定するなど教育改革の制度設計が進められているが、教職員全体で教育活動を振り返り、改善を目指す行動が見られないことから、ICT活用も含む質保証の工夫を教職協働で探求する機会とした。

特に配慮した点は、一つは、質保証を進めていくために学位中心の授業科目編成に切り替えていくことの重要性を認識いただき、改革の制度設計に魂を入れていくことにした。

二つは、アクティブ・ラーニングによる失敗事例から効果を高めるノウハウを共有することと、文系・理系・医療系分野でのICTを活用したアクティブ・ラーニングの取り組みと課題を共有することにした。

三つは、地域連携活動の中で獲得した知識・技能を活用するPBL教育の工夫を紹介するとともに、ネット上で知識を組み合わせてアクティブ・ラーニングする分野横断型授業モデルについて、医学・歯学合同委員会から提案することにした。

四つは、質保証としてのIR導入の現状と課題及びIR活用の実際、IRシステムのイメージと大学の体制等の対応を共有することにした。

五つは、情報教育委員会で検討している『価値の創出を目指した問題発見・解決思考の情報リテラシー教育モデル』の具体的な授業方略を説明し、大学として組織的に展開していくための教員間の連携、教材開発、評価方法などについて意見交流し、課題を整理することにした。以上、1日目に全体会、2日目にテーマ別意見交流を行うとともに、3日目にかけて大学・企業共同によるICT導入事例の紹介をポスターセッション形式で実施することにした。なお、開催要項は、次ページを参照されたい。

平成28年度教育改革ICT戦略大会プログラム

9月6日(火): 全体会

9:50	開会挨拶 公益社団法人 私立大学情報教育協会 向殿 政男 会長	会場: 3F 富士
10:00	【教育の質的転換に向けた内部質保証の一体改革】 三つのポリシー (入学選抜・カリキュラム・学位授与) 省令化による内部質保証の課題 三つのポリシーはほとんどどの大学で定められているが、実際の教育活動との整合性・関係性が意識されていないことなども指摘されている。問題は、大学が掲げる育成すべき力を確実に身につけさせるには、入学者受け入れ方針を入口として、人材養成目的である出口としての学位授与方針と学位プログラム中心のカリキュラム編成の整合性など、教員個人と教員組織による教育内容へのPDCAによる内部質保証の仕組みと理解が喫緊の課題となっている。	
11:30	【質保証を目指した試み】 学修成果の可視化と改善への取り組み 教育の国際標準化に向けた学修質保証システムを構築するために、アクティブ・ラーニングを中心とした学修成果の可視化を地域の産業界と協働して成果指標を開発し、ポートフォリオ、ステークホルダー調査、IRなどを用いて多面的に教育改善に取り組んでいる。 共愛学園前橋国際大学 副学長 後藤 さゆり 氏	
12:30	休憩	
13:30	【アクティブ・ラーニングの効果を高めるノウハウ】 アクティブ・ラーニングの振り返りと課題 アクティブ・ラーニングが様々な分野で広がり、深化・発展していくときに、これまで体験した失敗の原因と結果について振り返り、多くの関係者に授業設計するための留意点及び対策について「アクティブ・ラーニング失敗事例ハンドブック」として知識化を試みた。 名古屋商科大学 経営学部教授 亀倉 正彦 氏	
14:30	休憩	
14:45	【アクティブ・ラーニングを導入した地域連携教育】 地域と連携・地域を活用したPBL教育の導入と効果 学問と社会のつながりを理解し、考え、行動できる「課題解決人材」の育成の一貫として、「地域」「社会」の現実的な課題をケーススタディとして取り上げ、ワークショップや学生主体による実践的な課題解決のアクティブ・ラーニング手法の開発推進に取り組んでいる。 信州大学キャリア教育・サポートセンター副センター長 林 靖人 氏	
15:45	休憩	
16:00	【知識の創造を目指したアクティブ・ラーニングの考察】 ネット会議による分野横断型PBL教育の提案 健康社会の実現に貢献できる医療人を育成するため、多職種視点をも多面的に組み合わせる中で、最適な解決方法を考えるクリティカル・シンキングを中心としたPBL学修が必要となり、多方面の有識者からの知見を教材にしてネット上などで知識の創造を目指した学びのモデルを考察した。 本協会 学系別FD/ICT活用研究委員会委員、昭和大学 歯学部教授 片岡 竜太 氏	
16:50	総括 (教育改革ICT戦略大会運営委員会)	
17:00	終了	

9月7日(水): テーマ別意見交流

10:00 ~ 12:30	【分科会:A】 ICTを活用したアクティブ・ラーニングの取り組みと課題 アクティブ・ラーニングを効果的に進めるために、ICTを活用した分野別の取り組みを通じて、授業方略、学修成果の評価、学修支援の仕組みなどについて留意すべき事項及び課題について認識を共有する。 ・人文・社会科学系 「大人数授業での双方向型アクティブ・ラーニング」 小樽商科大学 社会情報学科准教授 大津 晶 氏 ・理工系 「学修マネジメントシステムを用いた事前・事後学修」 東海大学教育研究所長代理 理学部准教授 及川 義道 氏 ・医療系 「双方向性遠隔教育システムを活用したPBL教育」 岐阜大学医学部教授 丹羽 雅之 氏 大学・企業連携によるICT導入・活用事例(ポスターセッション)の概要紹介 アクティブ・ラーニングLMSシステム、ラーニングエコモモンズ、ポートフォリオシステム、IRシステム、教学マネジメントシステムなど 休憩	会場: 5階 大書
12:30 ~ 12:45	【分科会:B】 教育を客観的に振り返るための情報環境整備～IR導入の取り組みと課題 教育活動の実態を客観的・体系的に把握し、大学が抱える問題を科学的に分析し、その解決策を提言する仕組みとしてのIR導入の実態とその効果・検証について認識を共有する。 「質保証としてのIR導入の現状と課題」 筑波大学 大学研究センター特命教授 金子 元久 氏 「大学に求められるIR機能の実現に向けて～IR活動展開の課題と学修成果の可視化」 京都光華女子大学 副学長、EM・IR部長 水野 豊 氏	会場: 5階 穂高
14:00 ~ 16:30	【分科会:C】 アクティブ・ラーニングの評価方法 主体性、多様性、協働性などのコンピテンシーの評価は、客観的に点数評価が難しい難しさがあることから、アウトカムの設定を工夫する必要がある。現在、取り入れられている評価手法について、その効果と改善に向けた課題について認識を共有する。 「ルーブリックの導入効果と課題」 創価大学総合学習支援センター長 経済学部教授 関田 一彦 氏 「ピア評価の導入効果と課題」 摂南大学薬学部特任助教 串畑 太郎 氏	会場: 5階 穂高
16:45 ~ 18:00	【分科会:D】 価値の創出を目指した問題発見・解決思考の情報リテラシー教育モデル これからの時代に求められる能力として、自ら問題を発見し、課題解決に向けて主体的に解を見出す能力が求められている。その学修基盤として質の高い情報を取捨選択し、情報を活用して課題探求及び新たな価値の創出のために使いこなす情報活用能力を育成する初年次教育と専門教育を連携した教育モデルを提案する。 本協会情報教育研究委員会 情報リテラシー・情報倫理分科会 分野別情報教育分科会	会場: 4F 鳳凰

※参加費 別途 4,000 円が必要です。  
情報交流会

12:30 ~ 17:00  
大学・企業連携によるICT導入・活用事例(ポスターセッション)  
アクティブ・ラーニング、LMSシステム、ラーニングエコモモンズ、ポートフォリオシステム、IRシステム、教学マネジメントシステムなど  
会場: 5F 廊下

## (2) 実施結果

9月6日から8日の3日間、東京市ヶ谷の私学会館を会場に、155大学、13短期大学、賛助会員13社が参加し、発表者を含めて441名が参加した。以下に全体会、テーマ別自由討議で確認された主要な点について報告する。

### [全体会で確認された主要な点]

- ① 3ポリシーは9割以上の大学で設定しているが、教育活動と連動していない例が多く見られる。教育の質的転換を全学的に展開していくには、教員一人ひとりが理解し、教学マネジメントに関われるようにすることが喫緊の課題であることが認識された。
- ② アクティブ・ラーニングを中心とした学修成果の可視化を行うため、地域の産業界と成果指標を開発して、eポートフォリオの活用、IRなどにより多面的に教育改善に取り組んでいる仕組みが確認された。
- ③ アクティブ・ラーニングの失敗事例から、学びが能動的でない、学びがない、教員が近視眼的になり将来構想力が欠如しているという共通の要素があることが確認された。
- ④ 多面的視点から問題を整理し、多職種の視点を組み合わせる中で、最適な解決方法を見出すクリティカル・シンキングの学修方法として、ネット上で他分野の有識者から意見を集約し、それを踏まえてチームの解決策を作成する分野横断型のPBL教育モデルの必要性が確認された。

### [テーマ別意見交流で確認された主要な点]

- ① IRに求められる機能としては、人件費が教育資源としてどのように使われているかなど、判断できるデータ解析の提供が求められる。IRの課題としては、問題認識が大学にないと機能しない、縦割り志向を見直すことが重要であることと、IRを担当する体制作りなどが山積していることが確認された。
- ② IR活動の事例として、早期退学者の防止対策、授業改革の点検などで活用しており、今後の展望として、入学から卒業まで学生一人ひとりをきめ細かく支援するエンロールマネジメントの実現を支えるためのIR、教育の質を担保するIR、経営戦略に寄与するIRの方向性が確認された。
- ③ 価値の創出を目指した問題発見・解決思考のリテラシー教育のモデルは、委員会の提案について多くの賛同が得られたことから、今後、具体的な授業の指導方法、教材作成、成績評価などについて委員会として検討を進めることになった。

